



TITLE:

<雜錄> 逸周書作雒解と北魏大洛陽城

AUTHOR(S):

森, 鹿三

CITATION:

森, 鹿三. <雜錄> 逸周書作雒解と北魏大洛陽城. 東洋史研究 1952, 11(4): 331-331

ISSUE DATE:

1952-02-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138938>

RIGHT:

逸周書作雒解と北魏大洛陽城

逸周書の作雒解は周の洛陽城建設の記録と伝えられるが、その規模を城方千七百二十丈、郭方七十里と記している。七百を六百の誤とすれば六尺が一步、三百歩即ち百八十丈が一里であるから、千六百二十丈は九里であつて、周禮考工記に國即ち都城が方九里というのとうまく合致する。次に郭——郭に同じ——が方七十里というのは額面通りに受取れば方九里の都城を包んで一邊七十里の正方形の外郭があつたことになる。しかしその後、「南は洛水に繋り北は邾山——北芒山——に因る」と明記してあり、しかもこの南北の距離は別稿でも述べたように大體十五里であるから、七十里というのはあまりにも過大である。それで王應麟の詩地理攷などでは敢えて之を十五里に改めている。藤田元春博士は或テクストに方七十二里に作つてゐるのを活かして次のような新解釋を施している。方九里は八十一方里、その中央の王宮を方三里として九方里、差引けば七十二方里となるから、郭方七十二里とは城の中の王宮を除いた朝、市、民店をさすものだろうというのである（尺度綜考三六八頁以下參照）。數字はつじつまがある。

うけれども、城と郭とで「方」の字の使用法が異なり、その上に城と郭との規模が同じことになつてしまふので些か不安である。孫詒讓は七と二を顛倒して二十七里にすべきだという。そうすると王宮が方三里、城が方九里、郭が方二十七里で夫々三倍ずつになつて頗る整然とする。恐らく之が原形であらうかと思うが、實際の地勢を無視したデスクプランであることは上述の通りである。ともかく「郭方七十里」は解釋しにくい難物であるが、今これを持出したのは新説を提供する意圖があつてのことではない。たゞ別稿中に何度も繰返して引用した洛陽伽藍記の「京師東西二十里南北十五里」から、北魏大洛陽城の周回が七十里であることがわかるので、「郭方七十里」の方の字にさへ目をつぶれば兩者合致して甚だ面白い。それで餘白のできたのを機縁に提起した次第である。それも敢えて逸周書をそのように解釋すべしと主張するのではない。ひよつとすると、北魏の大洛陽城を周回七十里の規模に設定する時、逸周書の「郭方七十里」を周回の里數としてこゝに範型をとつたのではないかと臆測するまでである。